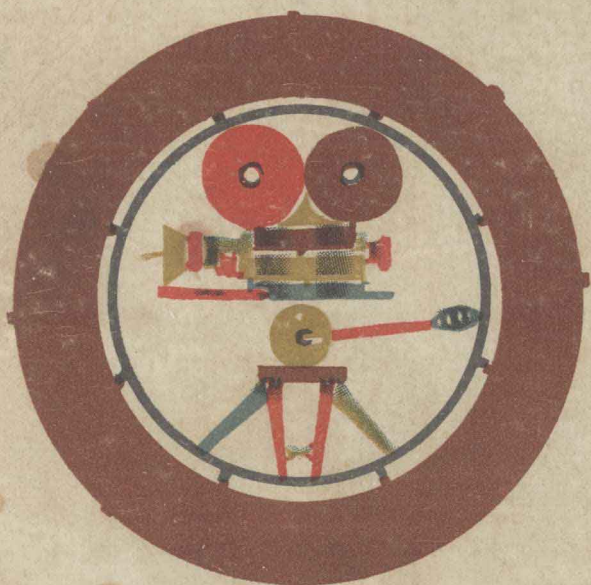


カヅボオヤ人類学

山 本 嘉 次 郎



養 德 社

カッドオヤ人類學

山本嘉次郎著

¥ 230

昭和26年7月10日印刷

昭和26年7月15日發行

發行者 東井三代次

印刷者 鈴木直樹
京都市中京區壬生花井町三

發行所 株式會社 養德社

本社 奈良縣丹波市町川原城
振替京都35648番

支社 東京都墨田區厩橋一ノ二〇
京都市中京區船場藥師室町西入

カツドオヤ三十年……………三八

カツドオヤ正月記……………二四二

カツドオヤ女性人名簿……………二五一

カツドオヤ雪月花……………一九六

ロケ記・ボケ記……………二〇四

ロケ記・モテ記……………二二三

目次

カツドオヤ春夏秋冬	一
カツドオヤ言語學	一九
カツドオヤ奇人傳	三
カツドオヤ人類學	五一
カツドオヤ出世學	六九
カツドオヤ道中記	八八
カツドオヤ貧乏記	一〇〇
カツドオヤ白頭記	一〇九
カツドオヤ出藍記	一二五

カッドオヤ春夏秋冬

夏

ふと目がさめると、私は木の堅いベンチの上に寝ているのであった。いくら眸をすえて見ても、漆黒の暗闇で、どこまでが空で、どこまでが森だか野原だか、そのはじめさえつかない。やがて、ゴウゴウたる蛙のひびき……鳴き聲とは云えぬ轟音が四方から耳をついた。

私はようやく、田圃の真中にある田舎の驛に寝ていることに了解がついた。

かすかなライターの光で、建物を求めたがそれらしいものも見えぬ。小さな驛名標を照らしで見ると「かをがみじふ」と書いてある。私は自分の頭を疑った、とうとうメチールにやられ

たか……しかしそれは右書を左から讀んだもので、正しく讀めば「ふじみがをか」であつた。

して見ると、泥酔のあげく、帝都線でここまで寝すごし、フラフラと自分で降りたか、あるいは車掌につまみ出されたかの、どちらかであろう。

身邊、ポケットなどさぐつて見たが、何も失つてはいない。こんな田圃の眞中では追剥も出ぬであろう。ただあるものは轟然たる群蛙のひびきのみである。

腕時計の夜光塗料は、あたかも冥土の鬼火のごとく蒼白い燐光を放つて、午前一時何分かを示している。或る日デパートで、つい興味にひかれて夜光にでもらつたのだが、イヤなものを塗つたと、この時つくづく後悔した。

こんなところで、いつまでもぼんやりしていたところでラチが開きそうにもないので家まで歩いて行くことに決心をした。南へ南へと進めば、二里くらいで我が家の方に出るはずである。

私はいつでも、方向感覚の正しいことを誇りにしている。山の中でも迷つたことがない。

私は深夜の道を、南に求めて、ひたぶるに、かつヨロヨロと歩いた。

犬の子一匹にも出會わない。わずか、小さな工場が、徹夜作業をしているらしい物音を聞い

ただけである。一時間半も歩いたと思われる頃、やや人家の櫛比した町に出た、そして、中空に裸電氣がギラギラと光っている處へ近づいて見ると、大きな踏切があつた。

いくら考えて見ても、我が家の方向に、こんな踏切がある道理がない。不寝の踏切番に訊ねると、そこは荻窪であつた。南に歩いたつもりが、北へ進んだのである。正にアベコベである。踏切のわきに交番がある。若い巡査がひとりで、立番をしている。これをタチバンと讀んではいけない。リツバンと讀むべきである。私はその頃「新馬鹿時代」を撮影すべく警察や巡査のことを調査していたので、この巡査をつかまえて、いろいろ内幕話を聞きながら、始發の電車を待とうというコンタンを持った。

刺を通じて話をしているうちに、向うでも次第に乗つて來て、待遇の悪さをカコチはじめた。命がけで強盜をつかまえても、署長の褒賞は、たつた二圓である。これをゼヒ映畫に出して下さい、ええ、出しますとも！と云つてるところへ、寢卷の上にレインコートを引掛けた五十過ぎの男が、ステッキを片手に飛び込んで來た。

近所の何々アパートの管理人だが、二階の或る部屋で若い女の聲で、助けて下さい、殺される、と悲鳴が聞えた。おまわりさん來て下さいと、たしかに二度まで呼んだ。強盜です！と

興奮している。

若い巡査は奥の部屋で寝ている同僚を起した。二帖くらいの畳敷に、二人の巡査が上着を脱いだまま、仰向けに軀をかいていた。その頭のところにケースから外したムキミのピストルがおいてある。

起された同僚は、「うう？ うう？」と聞き返すような聲を出して立上り、ムキミのピストルを握つたままの手を上着に通しながら出て行つた。

若い巡査は、じゃ後をネガイヤスと、私に海軍流の敬禮をして、そのあとを追かけて行つた。一時間ほどたつたが歸つて來ない。酔さめか喉がかわいて來たので、電熱器で湯をわかして茶を淹れて呑んだ。それでもまだ歸つて來ない。餘程の大事件かも知れないと思つてみると、踏切の方から長い竹の棒にすぎるようにして、老爺がトボトボとやつて來た。

成田に行くには、どっちに行けばいいかと問う。成田つて不動様の成田ですか。そうです。どっちにしたつて、そいじゃ遠くつてと云うと、老爺は何か物欲しそうにウロウロしていたが、私の背廣姿にあきらめたらしく、不得要領なおじぎをして、また長い竹の棒にすぎりながら去つて行つた。そのうち黎明近い清冷な空氣が流れて來た。

間もなく三人の巡査が歸つて來たが、みんなムツツリしているのでとりつくしまがない。やがて、私の出した茶を呑みながら、人つて判らないもんだな、あんなチャンとした女が、あんなことをすんだからな。オラ男同士つての聞いたことあるが、女同士つての初めて見ただよ、なぞと噂をはじめた。事件は強盜でなくて、變態女の痴情沙汰らしい。

一番電車の音が、ひびいて來た。

一夜を楽しくすごさせて呉れた交番を辭し、電車に乗るとガランとしていて、隅の方に買出しのヤミ屋らしいのが五六人寂しくかたまつて、今日はどこがヤバイと取締のことを熱心に語り合つていた。

秋

俳優のS君が、是非會つてやつて下さいと云う。再三斷つたのだが、そうそう斷り切れなくなつて、ある宿屋に連れて行かれた。そこは大きな中華料理屋であつたが、政令以來宿屋に切

かえたものである。

相手は大成金氏である。會つて見ると、小さな貧弱な男なので、いささか期待に外れた。ビール會社から二百本取つて來たから、大いに呑みましようやと、しきりに乾盃させられた。料理はサラダが出て刺身が出て、ビフチキと蒲焼と、一皿に同席していてという風にメチャクチャだった。

宴たけなわなる頃、大成金氏は立上つて大音聲をはり上げた。

「よオレツ！　一ツ、二ツ、三ツ」

するといきなり耳も割れんばかりにジャズが鳴り出し、スルスルと間の襖が開いて、ジャズバンドの前で、踊子が踊り出した。

一時は例のエロレヴユウかと緊張して見たが、それはただ當り前のレヴユウの一幕にすぎなかった。

「どうです、あんたの演出より、チョトましでしょうが」

氏は得意そうに何べんも云つた。

その後、その踊子も宴席に連なつた。

氏はその一人を私に紹介して

「どうです、いい子でしょうが。よろしかったら映画に一度出してやって下さい」

これで行くやう今夜の宴會のイミが判つた。二百本のビールが百本くらい空になつた頃、私は座を逃れて、裏座敷へ行つた。裏はすぐ海だつた。ちやうど十五夜の月が、水際を離れたところで、ポタポタと雫も垂れんばかりであつた。

此處は終戦までは工業地域のドマン中であつた。詩に歌にロマンスに謳われた此の海岸は、波の打ち寄せられる毎に、機械油の腐つた臭氣を發した。名物であつた海岸も死に絶えてしまつたのである。しかるに今は再び清澄な昔の風景と化している。國ほろびれば山河もまた姿を變えるものか。

その明治調の眺めは、小林清親の版畫そのままである。私は、そくそくと敗戦というものの淋しさを、戦後はじめて胸の奥深く味わつたのであつた。

冬

さつきから、一人の男が癪にさわつてならなかつた。來客の中の女をつかまえては、そんなキレイな恰好をしているが、パンパンだろう。なんでえお嬢さんづらしやがつて、インバイのくせに、というふうに一人ずつやつている。

今年ようやく歳末の大賣出しの旗が見られ、巷になつかしいチンドン屋が鳴りひびいた。その師走も押しつまつた頃である。

男は、電車が揺れる度に、ヨロヨロとあつちこつちの女の處へよろけて行つては、相手かまわず毒づいている。プーンとカストリ獨特の焦げ臭い匂いがした。

やがて私は、乗換のためにその電車を降りた。すると、ここのプラットホームでも、その男は、手當り次第の女をつかまえては罵倒しているのである。

「怪しからん、やつちやいましょう」

私の隣にいた五十すぎの紳士が、私を誘つた。酒のいきおいもあり（こつちも相當酔つてはいた）けしかけられた機^{はし}みで、私は、その男の胸倉をつかんで、いい加減によさないかと決めたが、私には自信がなかつた。いや、自信を失いつつあつたのである。一緒にやつて呉れる筈の老紳士は、いつの間にか姿を消してしまつてゐる。まさに私はたった一人である。語尾

が、だんだん弱くなつて行つた。

そこへ電車が來た。私にとつてはモツケの幸いである。恥をかいったり痛い思いをしたりせず
に、此の喧嘩の結末をつけられるからである。それにこの電車を外すと、私の家の方へ行く電
車はないのだ。あとは車庫どまりで、家へは線路づたいに一里以上も歩かねばならない。私は
その男を振りもぎつて、出かかつた電車に飛び乗つた。

ところが、その電車も車庫どまりだつた。家の方へ行く電車は、もう一臺前で終りだつたの
だ。仕方がないので、線路を歩き出した。

「私も連れてつて下さいよう」

ひどく憐れつぽい聲がしたので、振向くとさっきの喧嘩の相手だつた。

その男は、いきなり私の片腕にしがみつくや「先生！」と云つた。私のことをどうして先生
と呼ぶのかと考えたが、片腕は、その男のするがままに任した。その手の握り具合が、唯事では
なかった。變だと思つていたら、その男は泣いているのだつた。

「先生。私アね、私ア昨日シベリヤから歸つて來たんです。歸つて見るとネ、歸つて見ると、
ウチの奴が、パンパンやつてんです、パンパンを。それで、千圓もらつて、カストリ呑んだん

です。いけませんか先生。いけませんか、教えて下さい、先生」

その男は、わアわア泣きながら、私にとりすがった。

私はいささか感傷的になつて、よつぽどその男を家に泊めてやろうかとも思つたが、もしかすると強盗に居直るかも知れないと考えて思い止まつた。

冬の星がチカチカする下を、その男は、なんどもなんども、先生さよなら、先生さよならと云いながら、遠去かつて行つた。

うむ、これは映畫になるな。ええと、電車の中でクダを巻いているところをファストシーンにしようか、それとも彼が家へ歸つたところから出ようかと工夫しているうちに、いつの間にか自宅の門前に立つていた。

春

夏、秋、冬とならべて、一番終りに春とつけたのは、はなはだオカシイ。ビフテキが出て、

サラダが出て、コーヒーを呑んでから、いきなりスープを出すようなものである。

實をいえば、春の部に大變面白い材料を着想したのである。そこで、これを春とし、あとから夏、秋、冬という材料をつけ加えて四季にしようとした。だが春の題材は面白いが表現がむずかしいので後廻しにして、とりあえず樂な夏、秋、冬から書くことにした。

それを終えて、これから眼目の春を書こうと、材料をゴチャゴチャと記したメモを探したが、無い。そのトタン、こいつアいかんゾと不吉な豫感がした。果せるかな、メモの有無は別として、一體全體何を書くつもりだったのか、どうしても思ひ出せないことになってしまった。

犯人は、この豫感という奴である。上野驛にエンエンと列を作つて、切符を買つたときのことだった。二時間か三時間待つて、ようやく自分の番になり、窓口をのぞいて

「あのオ……」

と云つたトタン、この豫感という曲者にとつ捕まつてしまった。何處へ行くのか、どうしても思ひ出せないのである。そこで、自分は今、何の用事で旅行しようとしているのか、それから思ひ起こそうとつとめたのだが、背後にエンエンと並んでいる連中が

「早くしろい！」

「グズグズするなッ！」

「つまみ出せ、つまみ出せ！」

なんてワアワア騒ぎ立てるので、ますます以て、いけない。とうとう窓口に向つて

「すみません」

と謝つて列を離れてしまつたが、あんなバカバカしいことはなかつた。

つまり、この豫感という曲者は、頭の中にある記憶が外へ出ようとするのを、暴力をもつて押えつけているらしいのである。善良なところの記憶氏が責任を感じて、なんとかして出ようと焦れば焦るほど、もがけばもがくほど、この犯人は暴威を振つて押さえつけてしまうのである。マサに強力犯である。

「失われた週末」で、買つて來た酒を何處に置いたか思い出せず、狂氣のように捜しまわる場面がある。主人公の焦立たしく苦しく、癪にさわつて情けない氣持はよくわかる。あのときのレイ・ミランドは、ベソをかいていた。ベソ以外に表現はないのである。

さて、何を書くのか度忘れすると、その材料がとても面白く貴重なものに思われて、残念でならない。釣り落した魚は大きいというが、それと同じ心理である。だが、いくら思い出そう

としても無駄である。なにしろ相手は豫感という強力犯であるからだ。

上野驛の場合は、實は秩父へ行くつもりであつたのである。秩父にロケーションに行くことになり、その下交渉のためだつた。しかし、その下交渉はいつもの場合とは違つて、大變面倒な問題を含んでいたのであつた。秩父銘仙の織物組合とタイアップして、一千人ほどのエキストラを出してもらふことになつていたのだが、新任の警察署長と土地の親分とが正面衝突し、そのイザコザの中に、このエキストラ問題が捲きこまれてしまつたという、ヤヤコシイ次第なのである。

それを單身、敵地に……という程でもないが、そこへ乗り込んで行つて、組合と警察と親分との間を調停し、豫定通りの撮影をさしてもらふ、その交渉のために上野驛から發とうとして、豫感という曲者につかまつてしまつたのである。

あの場合、群衆が騒がなかつたら、この旅行の目的はすぐ思い出せたかもしれない。しかし、フロイドの説によれば、人間は不快な記憶は、なるべく忘れようとする傾向があるそうだから、もともと氣が重くなるこのイヤな旅行の目的を思い出せぬのは、當然であつたのかとも思われる。